

交陽問答

二下



交易問答卷之下

加藤弘藏著



才助

おき服中らり。きりきり。是ら。又下子の長談義と始めませふが。そこでのこのお梅でハ。日本ハ日本國內の徳色で。十分又著せる國でありらる。何れ西洋人と交易とせらるよハ及む

ふいとごとといひるさうけけれど。失^し控^け
るみぐらそれが東^{あづま}のん坊^{ぶつ}邊^へとゆふも
のでござる。何^{なん}在^あとゆふ先^{さき}刻^{とき}も話^わ
ト中^{ちゆう}と通り。世^よが開^{ひら}始^めつて。うんくと
賣^う買^かの道^{みち}を開^{ひら}けと時^{とき}分^{ぶん}よハ僅^{わずか}き村^{むら}
を々^{々々}の内^{うち}斗^とで賣^う買^かとしとゆれど
が。それうらうんくと開^{ひら}けるよ後^{あと}く。
拾^{しゆ}里^りも二^に拾^{しゆ}里^りも隔^へつと。國^{くに}くよ往^ゆ

くろり来くろりして賣買とまじる根り
ろり。それろり又関東りら上方の方
又往くろり上方りら関東よ来くろり採
りて。賣買とまじる根りろりこのでござ
るが。け根り往來りして賣買とまじる根
りろり。さことろりも。あかがり其土地
土地で。物りろり不足りらろりる
ろり。とりふのでござい。随ろり其

去地くぐ問よ合れむ。それどもを
まらふゆへにけれども。そこら入る
とり小者ハ禽獸ちくま杯と遠て。知恵の二升
よ後て。あ事あひく。と十分よ金せん伎い
きよの根よ志し。いとよ天性てんせいがあつて。
又其志し。いとよたからが働はたら次第しだいで出来
る根よ神様かみさまが生う付つけて置おて下くだされよ
うらの事ことでござる。そここでころろ考かんがへ

見らるる。以前市公儀で。交易と盛よ
志中りともさつこのも。と度
天子様の交易と盛よあそむさつと
思召すのも。即け道理で。何も日本
国内の諸色で。あそぶが足りる。い
とよふ。けで。はる。い。足。下。の。い。ひ。あ。さ。る
通と追交易と。あいで。海で。来。る。日
本國の。い。づ。ら。も。海。も。い

皆みな蓋やもも立たるい物ものごととりしけれど。決き
しくそりでハあいままの中一いち銃じゆう砲ぱうごの。
船ふね艦かんごの或ある時とき纒けんごのを始はじめ。中ちゆう々
日に本ほんでハ是これ上ま思しもつつららふ。結むす構かま
るる品しやうがらくくらもあり。又また品しやうよよりてハ
随ま分ぶん玩あそ具ぐの振ふるスの物ものもああるるけれど。そ
こがことも内うち話わししと通と人ひと向むかとりふ者ものハ
開ひらてまるるよよ後のちで。物もの事ことの全ぜん伝でんとりふ

の巻六

四

のと好む天性があるりのごうらまは
 てとから入用る物が揃へ上であつた玩具
 も自然と入用るあふまゝなのでござる
 唯通入用る物斗ではさむとりふ
 のハ誠まことに開ける多い國の事であらう
 譬たとへてしやうが昔むかしハ髪かみと結むすふやも油あぶらと
 りふあもるふければ元結もとむすとりふあも
 るつた所ところ唯藁わら何なにりで結むすて盡つ

の
と
の
せい

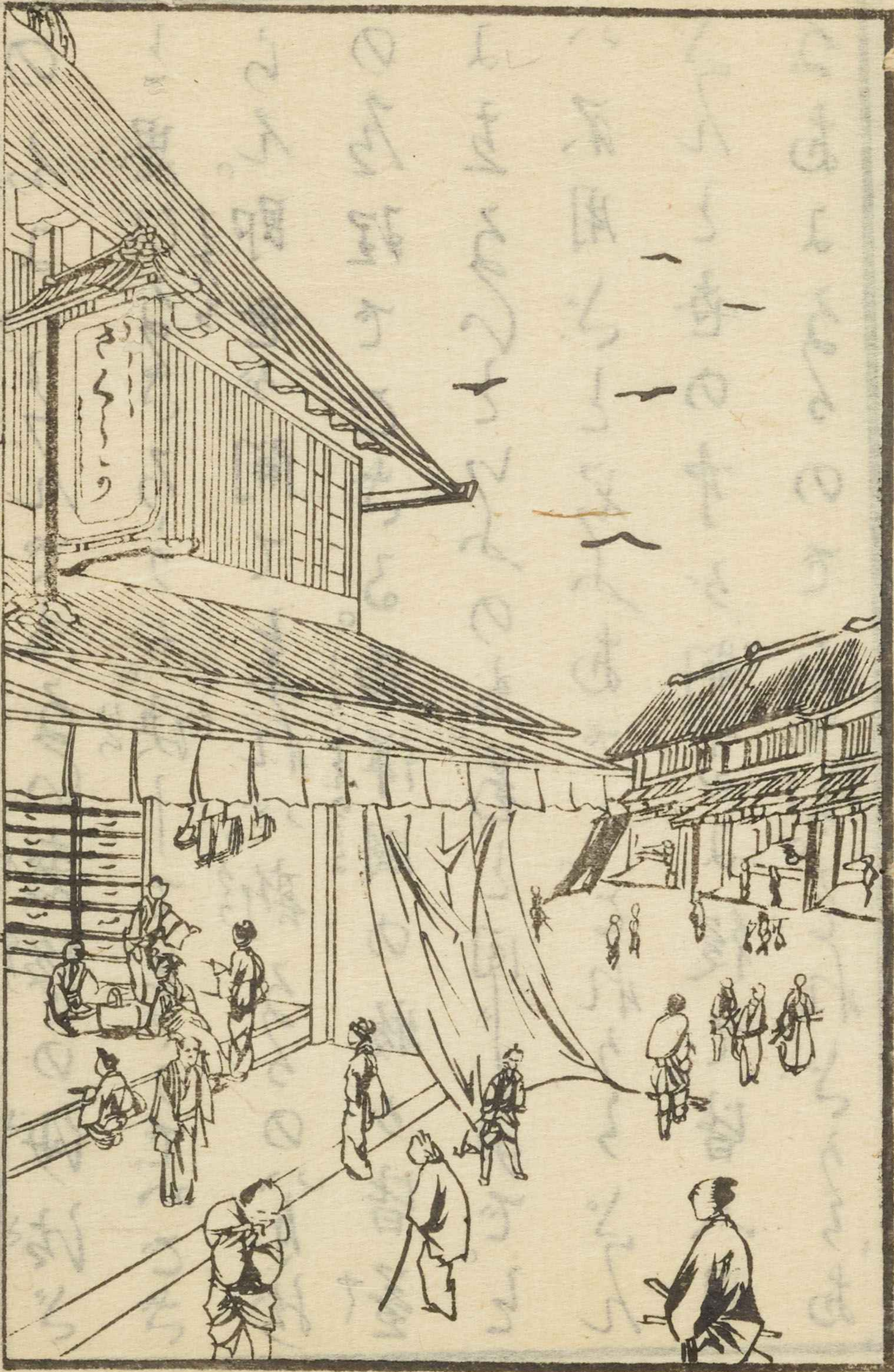
の
り
の
り

ふ考^{もの}ごが後^{こゝろ}世^よよる^よつて。油^{あぶら}の^いれ^{もの}が
が^あで^まき。元^{もと}結^{むす}と^いふ^あが^まで^まきて。あ^いは^ら
よ^も立^た流^らよ^も髪^{かみ}と^い結^{むす}よ^も粘^ねよ^もる^よつて。今^{いま}
で^は一^{いち}日^{にち}も^もろ^ろく^てハ^はる^るう^んり^のよ^るり
ま^ま一^{いち}と^と。若^{わか}り^しも^も理^り窟^くと^いつ^つて^いえ^れば。
油^{あぶら}が^ある^るく^くつ^つて^も髪^{かみ}の^の結^{むす}も^もれ^れぬ^ぬ通^と理^り
も^もろ^ろり。元^{もと}結^{むす}が^ある^るけ^けれ^ば矣^や。張^{ちやう}昔^{むかし}の^の粘^ねよ^も
葉^はろ^ろ何^{なん}り^もで^でゆ^よら^らく^て並^なて^も。海^{うみ}ろ^ろい

... 葉の... 何れ... 結... 並

道理はるまじけれども。そこが即人なる固有
 の天性で。あひくあつが全依するのと
 好むりのごうら。油とりふあが入用よ
 ろつて。それで髪かみの潤澤うるわの出でる松よ。
 りろくろくらと用ひして。ごんくごんく巧者たくしやよな
 り。とでハ中ちゆうれれ揚やう香かうぶぶの松しょう金きん香かうぶぶれ。
 まぶつこのころらんごのごと。あひくよせい
 うくよろつて来るとりふのハ足あし下した杯さい

○卷下



のんよハ。とんでもるまい。奢侈との沙汰さど
と思ひるまじらうが。決けつしてそらうでハござ
らえ。即すまじち世が開てと事れば。斯かうらうのハ月
の存理でござる。西洋國しやうとんのかうの物が皆や益
よまらまいとらふのも。是と同どうらうで。と
ハ不用ぶと名ふあでも。これらうらうら
うらんと世の中が開るよ。後て。皆入用
らあよらうのでござる。それらうらあ

の入用不用とりふのハ大抵ハ世の開
け次身つぎみの事ことで。唯ただしむ暮くしてま
ふればふいとくを。昔も今も食物ハ
腹はらが備そなえられらば。衣服いふくハ多おほくさ
つるければ。住居すまいハ露あめさう凌しのげ
ば。いとすねるすりた。何も遠方とんぱうの
あとあと求もとめるもとも及およぶぶ。それこそを村
々々の内うちで。何も角かくももののがが十じ分ぶん又また足た

るよ相違ハあけれども。人間といふ者ハ
 決してさうりハあらん者ごとせし。それど
 うら西洋人との交易ハ有用ありはで
 決してせざるもよいとしかば。夫張日本
 国内同士の賣買も決してせざるも
 又日本国内同士の賣買が志あ
 けれどもあらん事あり。夫張西洋人との
 交易も志あなければあらんてはござらん

か。それよまじき近頃交易のおくけ
で。眼前世の中の大疑獄がすすら
ふゆがあらでハござらんり。それハ何ぞ
といふよ例の外國米の一件でござらん若
日本よ外國米がまひらふらふりの
うら。それらそ天保七年の飢饉も
まして。世れ中の疑儀とりふりけら
どんらあであらふらふり。今く外國米

の疑

ハ

一

のまじりつゝ身みぐ。僕わが等らの格かる者ものども。
 けせら昂あがりまをどろりろりろり矢張やじやう三度さんどは
 飯いとくゞて居ゐられるのでござる。それ
 づうら世よ後ごこごひ日本にっぽんよどんる飢う
 饑う饑うがあらふとも世よ界かい中ちゆう悉しつく飢饑う
 よるるとりふるゆも先まツハるままゆ也。
 そんな時とき分ぶんよハ何なに変かううら来きと
 持もくくるよ相遠あひとほるままいいららどど

ても天保七年の振る筈は、
あるゆゑにハゴザラフ。ナント頑六さんと云
等ハ決して西洋人しやうやうじんのたうけとりふで
はるまいか。今く交易のたうけでハゴザラ
んり。

頑六

成程是れ下の店理解ハ、
たをふ極でこ
ざる。實よりひるさる通、
日本國內同士

の巻

七

の賣買も。西洋人とは賣買も。畢竟ハ
 同ト存理ぶ。うら。世が開る。又後くハ。
 交易も矢張志あかけれハる。うら。ん。よ。お
 遠ござる。ま。い。又外國米の一件杯
 も。突。よ。り。ひ。る。さ。ら。る。通。今。多。く。交。易。の。あ。り
 け。又。相。遠。と。ぎ。ら。ん。倭。或。先。生。の。お。話
 じ。凡。そ。世。の。中。よ。ま。ま。大。切。る。の。ハ。百
 姓。下。ら。ぶ。つ。て。る。姓。と。り。小。者。ハ。累。さ。さ。を。

おん
 ひり
 ねん
 ちり
 どり

さのりといひるく糸百糸中泥まじり
 よるつて名業よ骨と折り。稲麦成
 まどめ。すすべで諸色と作り出でて
 れるりのごりごり。此の玉中
 天子様と始まると。僕輩の枯る残い
 者よ至る進身多相愈よとらるとある
 よ著して居らねる。それごりくら木よ
 てりつて見れば。姓ハねむ。武家方

心下

十

とちどめ職人や商人ハ枝葉の枯る
 者ぞそらりてござら。譬ハ松や杉と栂の
 とも先ツ才一よ栂の枯れるも根よ。始
 終ド氣と附ツて親シしく水と中チ栂よまじら
 ず。身一肝心クなるゆで。根さく枯クるけれハ枝
 葉ハ別バよよと附ツずとも。自然シと生立ナ
 りけでござら。傾イ合クしくらんと用て枝
 葉と世話しくればこそ。栂と赤カ葉ハて並

...
 ...
 ...

この日よハ。技業ハ自然と拙くるよき事なる
このりのでござる。人間は上も其通で。
市上で才ね一ね招の百姓と夫切して。農業
の盛さかるる格かよさく入いる事ことれば。技業乃
市武家方や町人よハ別べつよ市しをを話わがらら
とも。自然と其家業あんがあ楽らよよ出い来きる
りのぶぶそそううででござる。それそれぶぶらら聖せい人じん
と中ちゆうらの教きょうよよハ。るる姓せいと才さい一いよよ夫ふ切きり

て世話としく中り。又商人杯とり小者ハ
 怒心の深い者で。濡手で粟と掴む拵る
 儲として。せいしくよ著すりのぶくの。商
 人が澤山よらつて。高賣の道が盛り
 るると。甚世の中の風俗がころころり。
 其上よ大切る百姓が自然と気が変
 つて。おひくと田舎と逐出て商人よら
 拵る事よらつて。おのづと田地が荒る

振る事が出来る。何れも商人も
成丈取押して盛より振る事
のが。市上の政道の中一ごと
いふのでござる。日本国内の事
でさう商人の盛
より。簡樸より。のよ。ま
け。海洋人との交易も。盛
よ。あ。を。さ。は。上。世。の。中。の。風。俗。
か。ど。ん。事。よ。ら。で。ご。ら。り。誠。は。け。ん

のんる話でござらんら。さういふ。...

才助

頑六君矢禮るまぐら足下の程密ハ一向
らんむも偏屋る先生いふくそんるまるといふ
りのどぶがそれいその先生が漢土の太古のゆ
ハ何れも角でもいふゆいで後世のゆがま
でもいふゆいと思込で唐のりのどぶら
らそんるまぐらい事とらふのどぶら

そんな説せつハ今いま世よの開ひらけるい時とき分ぶんで
るまけければ通とらる事ことさらうでござる。
むむるむ姓せいととりりふふ者ものハハ農のう業ぎょうととすするるののごごら
らら。國くにのの根ねのの根ねるる考こうぐぐ貴きいい者ものよよハハおお遠とほ
るるいいががさされればばととてて唯ただ百ひゃく姓せい斗とああららてて世よの
中なかのの治ちるるののででももごござざららままいい。職しやく人にんやや商しやう
人にんととりりふふ者ものががああららててるる姓せいのの作しやくりり出いしし
ああららうう。いいららううののああとと製せいつつりり。又また其そのあ

と責うらささむいいりするりら。畢竟きつ百姓ひやくしやうの
 農のう業がふも益えきようり及および理りでござる。それど
 りららすすべて農のう工こう商しょうといふ者ものハ三さん鼎ていのこ拵がまこの拵がまこ
 るるゆゆので。相あ互いよう他たけけ合あててととああるる者もので。まま
 ツツでももるるくくつつててままととむむととりりふふ者ものハこととざざららん。
 儀ぎ商しょう人にんととりりふふ者ものハこととざざららんの深ふかいい者もので。濡ぬ
 手てでで粟あはとと拵がまむむ拵がまるる備まととりりてて。世よい
 しくしくよよ善ぜんすすりりののごごりりら。商しょう人にんがが多たく

るらて。商賣の道が盛よらると。世の
中の風俗がころくころるといひるさるけ
れど。それハとんでももるまい。万邊の程の窳
でござるを商人といふ者ハ。百姓より比て
見れむ。暑さ寒さの程も随に見れむ。暑さ寒さの程も随に
商人のころるい者で。利と儲りる事も大き
いけれども。何も丸で濡れて。粟と松む
招る儲り身も出来る者でもらう。又人の

ころいころふのハ。高人ハ百姓と遠く。
 市中ま又ち任たまて身み体たハ乐らどど。んんで骨ほねと
 物ものららるらけけれれババるるんんおお業わざどどううらら。自
 然ぜんと知ち恵えが聞きるるりりののでで。そそれれおおどどふ
 も徳とく實じつるる風ふうが薄うすくくるるりりののででどどううらら。
 俣ま是こゝハ人ひとく神かみ様さまくく載のいいるる固こ有うの
 知ち恵えと磨みがきき出いすすののでで。自じ法ぽうとととううらら
 るるりりののどどううらら。ああるるぐぐららいいるるめめと

ハシクもせん。是と云ふいとハシクハ人ハ成丈
る鹿よ育て。固有の知恵と出させ
い松よするがふいと云ふゆるる。候それ
でハ神様の古趣意よ背くでこそあらま
ごうらう人万の知恵が用て来ぬバ。自然
と徳實る風の薄くゆるるのハ仕方が
るいガ。されむと云ふ高賣さ人盛よるれ
バ人ガヨラケるつて。世の中の風俗が

恥れてもよいといふ道理ハ決してよい。
 才一風俗ハ正ましくするければよろしきゆで
 ござらるら。そこで 市上で成なり丈なり学問の
 開る程ほどは世話せわがあつて。飯い合しる活計くわくけい
 によよ進とれて学問がくもんとする事が出来るい考がう
 でも。自然じぜんと学問がくもんとする考がうと去よ似ねる
 中ちゆうよは世話せわとするいるのでござる。むも
 学問がくもんと去よこれむとそある人ひとがたのいむ



山
水
石
木
花
鳥
虫
魚
草
木
石
水
火
土
金
木
土
火
水
石
木
花
鳥
虫
魚
草

いふ譯ワカでハるけれども。惣ソウ体たい学がく問もんと
いふりのハ人の風俗をよしくするのみ。
第一肝心かんじんなる事よお遠とほざららん。さうり
いふとけざうら。是こゝ下もとハ商人しやうじんと寇こう讎しゆんの根
まひひるさるけれど。それハ決けつしてさうり
いふ者ものでハござらん。又商人しやうじんが盛さかよるれ
ハ大おほ切きなるる姓せいが自然じぜんと氣きが變かつ
て。あひくくと田舎いんがと近よ出でして。商人しやうじんや

職人扱よるるうら。田地があひくくと荒
るとりひふさうりけれど。是も甚る差
り程りでござる。先もいひふさうり通。
百姓とりふ考ハ。是を農ね者ものの折よる者よ
相遠あるいうら。随ま分ぶん田舎と嫌きらて。商人
や職人よるる者ものがさういでもさういが。保
それ斗でハ田地のあれる程ほどよるもの
者でハござらん。尤西洋國せいようこくでハ古昔こくせき

百姓の親貢が重すぎで。田地持が。自らの作つゝ稲麦の半額餘も奉貢よ取れ。其上よ何ぶの角ぶのと名と付て。金と取れ。人紙よつらとれ。うりするものぶら。何分もも百姓でハ活計が立るゝ。授るゝ。田舎と逐出て。商人よるる者もあ。れバ小職人よるる者もあり。中ても

卷一

十一

びんがら
あ
ぬまけ
こ

極貧乏の奴ごの。懶惰者ごのハ。乞食よまのぞるる。振る事があること。そりぞいり。不祥であひく。と。でござい。る。志。う。そり。り。不。祥。で。あ。ひ。く。と。る。姓。が。減。て。田。地。が。荒。て。く。ら。り。の。ご。う。ら。中。古。業。ハ。自。然。と。衰。て。え。の。仕。出。が。あ。ひ。く。と。走。く。ら。り。て。來。て。矢。張。高。賣。も。盛。よ。ら。り。ど。ら。り。の。話。で。ハ。う。く。及。つ。て。ご。ん。く。さ。び。れ。て。あ。い。た。穢。人。

一

一

や商人が多くなりあつたこととて。何の^せ益^ん
 もあらず。まもあらず。其國が衰^す微^びしとく
 若^わあつたこととて。是ハ金^{かね}くする姓の
 親^{おん}貢^ぐが重^{おも}すこととて。とふしともる姓
 として居^ゐてハ。活^い計^{けい}がつかふこととて。い
 の事^{こと}で。何も唯^{ただ}百姓の家の業^{わざ}が。職^{しやく}人
 や商人より見ると余^あ礼^{れい}者^{しや}があれ
 るより。さういふことより。いふに付^つてハ

ござらん。それぶうららきぐて年貢や
還上うんじやうの平均へうぐんがふくし集あひりて。る姓の子
貢斗こまが重おもとぞぶるとりふ招まねよさるけ
れハおむやみ妻よめよる姓が減へて田でん地ちが荒あはるとい
ふ事こともふく始はじめ終おしま農のう工こう商しやうが。三さんヶ都と舎しゃ
うへ参まゐるのりのごそりてござる。何なにれ
といふよ譬たとへば。る姓計けいが多おほくて職しやく人
や商人しやうじんがすくさるければ。る姓せいのるる

ふく... といふ... といふ...

の... といふ...

といふ...

うららぶらぶらと穢人けしや商人あひよりつて。
 金かねと儲たくわるま工たく夫ふうとさるら奴やつがち出で来きて。夫お
 うららあひくと忠ちゆう工こう商かうの三さんツつが割わり合あ
 うららり。又また穢けし人にんや商かう人にんがち多おほくくて。
 ろ姓せいがちすくるまけまば。又また穢けし人にんや商かう人にん
 の中ちゆううららも百ひやく姓せいよりつて金かね儲たくわと
 夫お中ちゆうりにといいふふ者ものがちいいくくららも出で来きる
 うらら。別べつ候こう彼かれ是こゝと。所ところ上うへで出で来きる
 折せり

長考
 九

がろくとも。自然と初合らうと参る
と相違ざらん。それより農工
高といふ者ハ三鼎ちがひで。三ツ共同ト極
世話とてさへあれバ。三ツが三ツ共
おしと盛よらうて。そこを以て
身上がぶんくうらりのごさう
でござら。それよのハ偏屈へんくつる先生と
いふ者ハ。け極る道理と知らるまいで。

多^{ばん}乏^{ぶち}よりあるのハ眼^めより見へし道程^{みち}で。
決して六ヶ敷^い程^り寛^くでも何^{なに}でもござらん。
尤^な御上^{ごじやう}で列候^{りやくこう}より彼^か是^ぜと忠世話^{ちゆうせわ}と
るささらばともよいとハりふりのくかん
とんと國^{くに}の身上^{みんがう}のふくろある格^かより其^{その}道^{みち}
とつけやうと思召^{おもうまへ}は忠時^{ちゆうじ}益^{えき}よハ才^{さい}一
箇^い賣^{ばい}の方^{かた}より忠世話^{ちゆうせわ}があつて。徳^{とく}を
のちけりしこの度^{たび}くろある格^かよりある

のが。肝心なる事。ぶそりて。ごびる。諸色
 の。ちけり。く。ご。く。み。れ。ば。元。の。仕。出。が
 ぶ。ん。く。と。多。く。あ。る。道。程。ぶ。り。ら。そ。こ。で
 る。姓。や。職。人。の。仕。事。が。自。然。と。多。く
 る。ら。よ。お。遠。ご。び。ら。ん。し。と。及。東。京。や。大
 坂。よ。交。易。場。と。出。立。ま。よ。ら。つ。て。ま。す
 ま。す。交。易。の。盛。よ。ら。る。格。よ。ら。る。と
 い。ふ。も。即。高。買。の。方。よ。出。世。法。と。い。ふ。

の。て。日。本。國。中。の。諸。色。の。仕。出。が。

つて日本國中の諸色のまをけりことよ
くあるさろつといふ。ありがたしい思はれでご
ざる。儀々所上の志世話とらぶのも。唯高
人よ其道と保いて志やりあるさうらむりり
で。刑よあれもこれりといふ^{たえん}あつたよ志世話
とあるさるものでハござらん。西洋國^{しやうやうこく}でハ
昔^{むかし}王様^{おうさま}がりろくと^き瑣細^{さいさい}なる事^{こと}まの^まが
世話とからさるものぶそつが。それハ

二五三

うつてうらまの事。被は高賣の
 害はろるるぞらでございひさうら
 こらけぶら。考ミナト時でハ先ツオ一は法を
 のらけうらうら招よさう世話
 があれバ。自然とる姓や歳人の仕出
 す法を多くうらて。畢竟ハ日本
 國の身上が。あひくうらうらけで。
 決して偏へん屈くつる先生せんせいのらふ中ちゆううらるる

法... 依... 居... 生... 心... 一...

鹿^らる^るの^り理^り窟^くハ^ハ取^とる^るよ^よ足^とら^らる^るの^のい^いゆ^ゆで^でと
さ^さら^らり^り。本^本は^は法^法と^と理^理は^は一^一なる^{なる}也^也。

頑六

足^あ下^さの^の法^ご論^{ろん}ハ^ハ突^とり^り又^又も^も法^法を^を至^至極^極。能^能吞^の呑^の也^也。
ま^まし^しし^し。僕^わも^もし^しと^と法^法ハ^ハそ^そん^んる^るの^の道^道理^理ハ^ハ分^わり^り
ら^らズ^ズ。唯^唯偏^{へん}屈^{くつ}な^な先^先生^生の^のい^いふ^ふの^の事^事と^とま^まい^い
と^と身^身思^思て^て居^いら^らる^る。今^今の^の法^法理^り解^{かい}で^で始^はり^りて^て
法^法を^をさ^さら^らる^るも^もし^しと^と。保^たま^まさ^さる^るも^もし^しと^と。僕^わも^もし^しと^と。

の旨おもにむらむい事ことがござる。まき通とほり
 の程ほど密ひそでしことを。是この程ほど解との通とほり。
 交易こうぎとりふりのハ決きしとらむいふでハ
 るい。實じつよりくてもらむいふよとお違ちがハ
 ござらんが。倭先わさき判はんも出で話わしと通とほえ来き
 英吉いざり判はんぶの。倭蘭わらんあぶのとらけ醜しう夷い
 が。日本にっぽんよ来きる目的めてとりふ者もの先まづ交易こうぎ
 と聞きてとらんくと日本にっぽんよ入い込こ。次つぎ才さいよりお

人と親しくする。て。口木人と欺して
あひくと帰服させ。あはづと口木の諸
をと買をしてとぐん弱らせ。遂に
日本の國迄も彼奴等があよ志あり
と。先生がくびく話るまうが。これハ
どふでござらふ。若醜夷が本道よそん
る大い目論見で来このるまうバ。後令

交易がらりくら結構な事よもあらう。
 そのころあゝ埃々日米國造も彼奴等
 があゝきれる粘るゆでハ。穢り船
 よ包ぶ毒と喰ふ粘るりのでハ出ろぞ
 らんら。セントオ助さん。足下の此論と
 どふでござる。

オ助

足下の此話も一應ハ此處でござる。往昔

足取兼付七
 西洋人
 此の

太閤様時代より來り西洋人ハ元來日本
と奪うばひとりふとり目論まくら見があらう
來り又お邊ござらんが。けさる世の中
があひくくと開けて。唯何の道理もろく
人の國ととりふとりふめハできらる世の
中で。伍令と國や武々國ハ。そんふんが
あつても。其外のまゝで承知しやうちいさすりの
でハバザらん。まゝそりハらふりの。人間

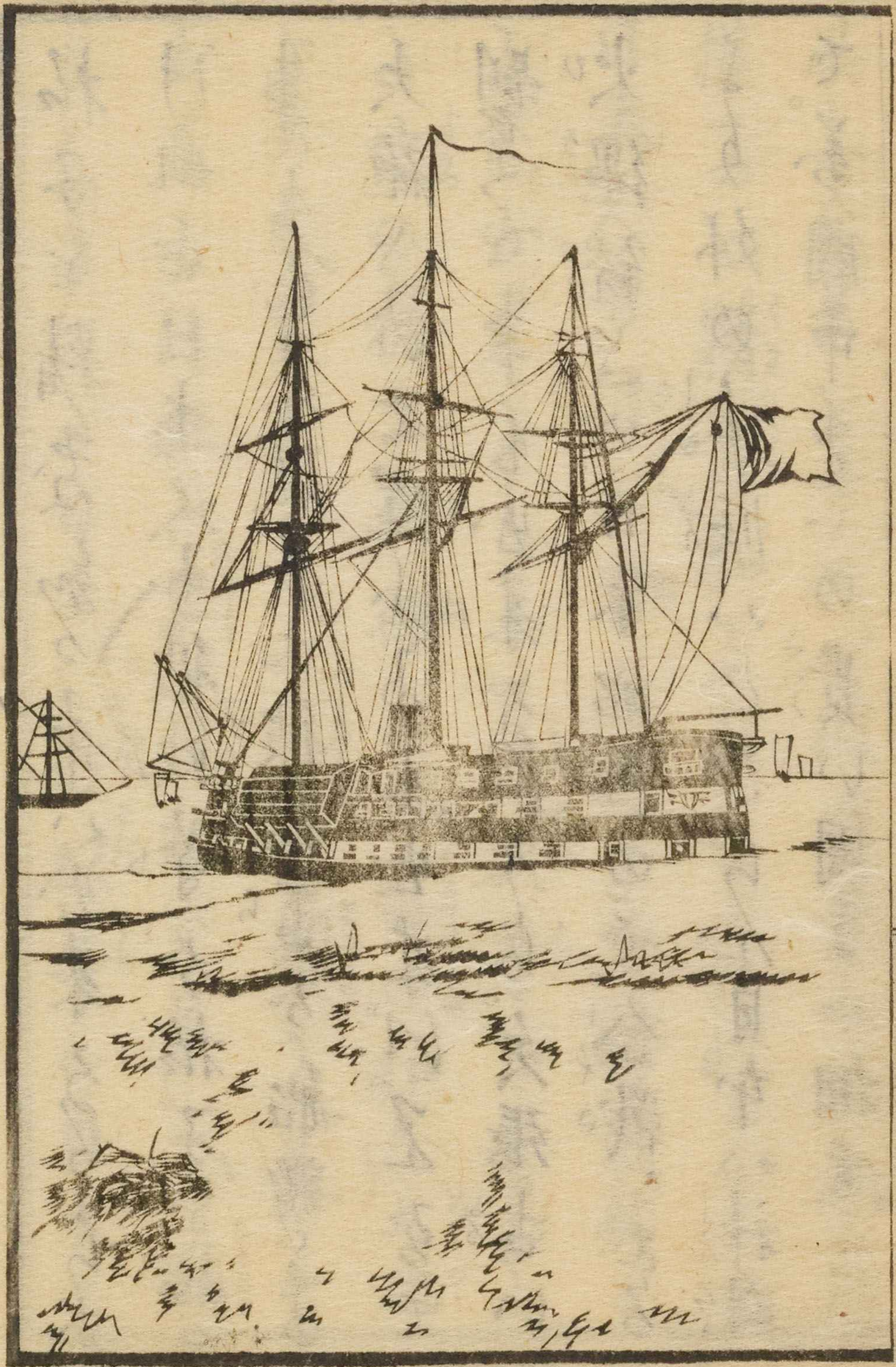
といふ者ハ。何時まで立ても怒人の纏る
 りのてハござらんりら。との西洋人よも
 そんる目論見が決しそるいともいそ
 れば。まゝ支那るどでハりらくのる違
 うら合戦の起つころもあれば隨分
 とすぶよらりてハどんるる違うら。何
 何時合戦と始まいりけでもるいりら。
 先西洋人よハ十分太い目論見がある

若と思て居るにければならんてござる。
僣僕等こゝろごもの考でハ倭令わいれい西洋人せいやうじんより
目論めとんえがあらふとも。矢張こらちけあてハ
怖おそび臆おそせび。交易かうぎをととるのと上じやう列れつ
でござる。伊左いざとりふ。西洋人せいやうじんより實じつより
日本にっぽんをととらふとりふ念ねんがあれバ。倭令わいれい
交易かうぎと出断しゅつだんりるさるゝとて。それそれで
念ねんがらせらるゝののでもござらまじ。

三六

其上交易とすれば彼奴等も日本の
 様子と精^{くわい}を^し知る^{べし}。さうふけれど。ま
 日本人も彼奴等^らが様子と精^{くわい}を^し知る
 るも出^で来^きる^{べし}。ま^づ彼奴等^らが考^が出^で
 城^{しろ}の様^{よう}な船^{ふね}艦^{かん}ぶ^の雷^{らい}の^う振^ふる大^{だい}砲^{ぱう}
 ぶ^のも買^かひ^しる^{べし}。又^{また}考^がて^て製^{せい}する^事も
 出^で来^きる^{べし}けれど。又^{また}自^じ初^{しよ}交^{こう}易^いと^し決^{けつ}断^{たん}
 り^るさ^らう^さり^しり^よハ^ハ彼奴等^らも日本^にの

板子と精を知らず事ハ出来らるらふ
けれど日本人も彼奴等が板子と知
事も出来ぬ。其上彼奴等が船體ごの
大砲ごのと買ふるも出来ぬ。又
製つる事も出来らる。矢張古い
火縄銃ごの。日本船ごので。合戦と
より外の事ハござらん。日本ハ神國
で。萬國中オオ一の貴い國ハ相違らぬ。

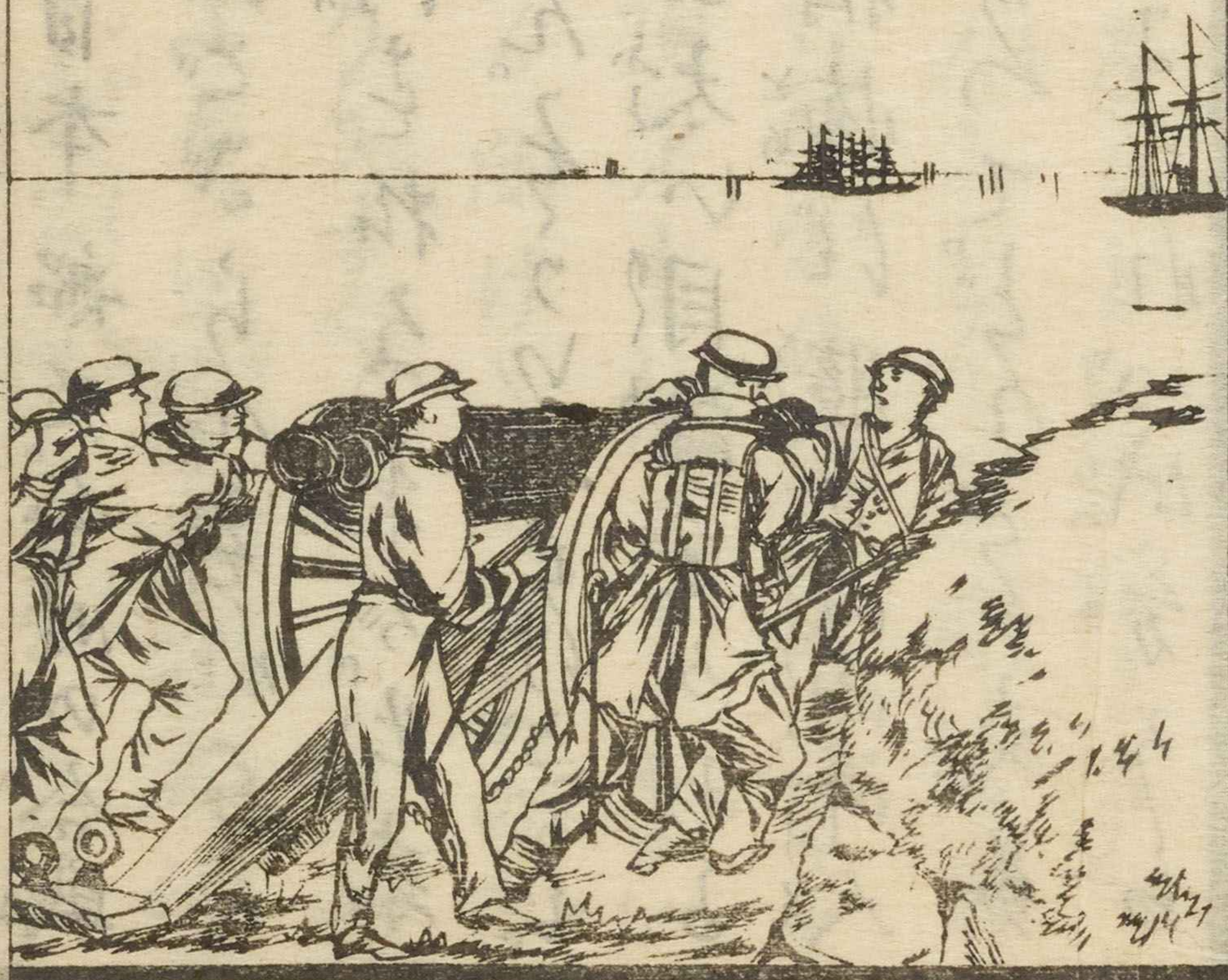


Vertical text on the right side of the page, likely a title or description in Chinese characters.



Small handwritten text or markings on the left edge of the page.

かいごん
海岸に
おろぐ
大砲を
そまへ
備へ
図づ



海防
三十一

が。連も火繩銃や日本船で。今時の合戦
が出来来るりののでいござらん。それこそ
神國の名まで汚けがを振る事か。出来
るまいとハシクません。そつりふりげごら
西洋人よそんる太い目論かえがあら
るらバ。日本でハ猶怖とめば臆おそむ西洋人
よ買まるまい氣きよらつてどんどく交易
どしてごらん。盛もよるれば。比ひ方かりら

も出掛て交易をまゐるといふ程又さへ
まれば。彼令西洋人よどんる目論見
があつても却て神玉の威勢よとそ
れて。遂又ハを目論見も挫てしりまひ。
畢竟ハ交易の道が開けさ丈。日本の由
徳よるるでござらう。すべてころり
道程があるりのござらう。先年亞米利
加の来し時。又は公使でまゐる交

易と申す許容もあり。猶又と及
 天子様の治政治よるるも。中よ。東京をととめ
 交易の盛よるる中よ。東坂や兵庫も。交易場と申す開さ
 又よるるて。あし日本國の身上がよ
 くるる格よと。厚い治世治のあるのハ
 突よありがさい治政道でいざざらん
 り。ナント頑六さん足下の治論ハ如何ぞ

頑六

おぼざるは明識があれは切ひもせよ。

どんくの理解識は感心しりしりしり

。実よ是下の内話の通。彼令西洋人

よどんる目論みがあるも志あり。矢張

怖げ臆せび交易とするのが上分列

よお遠ざざらん。しと志ハけ根る道理

のあり奉とハ志くしび。市上のは政道

と彼是とつらぐ中よこのハ誠まことよおき
れりつゝ事ことでござる。

才助

僕の愚論おろかなが市いち白びやく目めよよ為なままししらら。それ
ででこころろを僕わがも話わすすしし甲か斐ひががああつつて。
ああららととままららごござざるる。ししのの世よのの才さいのの
凡たゞ俗たゞととりり下くだりりれれハハ唯ただ何なにのの物ものももここらら
ららずず。漫ま漫まはは西せい洋やう人にんとと稗わい史しるる人にん杯はいがが多た

いの子。足下ハ僂底西洋人とリ小者ハ
太い奴で交易ハコリ小者と思て居
るさうな。と此ハ僕ボクのリ小者をと承
知るさうな。とぞ。とぞんとと僕ボクの話が
此お月むねは落おりのごりら。サラリと以いせん
の此こ論ろんと棄すてて去いるさうな。此こが実
は貴いい此こで感かん心しんりとす。とここで
ぞんとく此こ話わ中ちゆうに根ねるさうな。交く

易えきふど詰くわ構くわふりのハるい。交易えきセア
まをれバ國の身上しんじやうハどのづとよくあるて
徳とく色しきのさるいのも苦くよるらばくわ及あく
昔の物の中なかつすうろと時とき分ぶんよりハい幣へい
うくあるりれぶそらつでござる。是こゝら
ぐんぐ交易えきが盛さかよるらば。まをれ
つを昔むかし土つちをい外がいに金かねをい外がいといつ
と東あづま系けいが。是こゝらハ土つちをい外がいに金かね

二外い外うも。三外い外うも。ろるるでござらん。ナレト頑がん六さんおもろい。世の中おるつて来きとでハ。ござらんり

杞憂堂先生側きゆうどうせんせいがわらより

オツト才助大人さいすけおとな候まうあましく。僕ぼくをまじご感服かんぷくいっささん。貴様きさまハ例れいの耶蘇教やそけうの事ことを何なにと思おもふや。是これのら交際かうさいが成なぬふたな。是これの邪教よかけうの一件いけんが僕ぼくハ實じつるよ就しゆても。此こゝろの邪教よかけうの一件いけんが僕ぼくハ實じつ

卷下
三十二

お心よかゝるが。貴様ハ此邪教をよい
ものと思ふや

才助

是も實小由礼至極ぐおざいす。實
小耶蘇教と申に者も可惡もので。大
小我皇國よ害のあると申に。ハ。
毎度諸先生りも承つて居ります。ハ。
乍去去れハ由條約面も。洋人が

決して日本の人を勧進するらぬと
申す。取極むそらで去ざいまは
ら。万が一彼奴等が我知を以て勸進
振るるるをいふすすれば。それこそ
彼奴等より信義を破り已けて神
様へ對しては上の大罪を去ざいま
せん。その時おいふ身は焚れこ
そ日本國中の人が貴賤上下とあく。

身命を抛て。彼奴等を塵ふして。我
 神威を輝さねむ。あらめことごとく。おざ
 いませふ。茲の時。ふを僕の極るもの
 でも。神様の。功庇をうけて。神
 の民と生れよ。恩報よを授れ。とて
 彼奴等が。喉笛よ。喰付ても。五人や十
 人の。醜夷ハ。喰殺す。積りて。おさいま
 以。併以。以。を。皇學と。りりて。神代

多つと
 神代
 皇學
 神代

把憂堂先生

の号い道が。追て。西盛子るる。そうで。
 ございます。はら。彼令彼奴等が如何極
 小骨を折て。耶蘇教を擴めやふとい
 といふとて。追も及ぶるで。を。お。ざい
 す。す。海い。誠。は。雖有る。で。お。ざい。は
 出来さうり。考極も。神國の民ど
 け。あつて。箇極。は。大和魂を。傳へ。る。居

卷下 三十一

るとハ感心トヤ 非玉の氏を實よ
斯あそあまふんものトヤ

頌六

妙く。万一彼奴等が。そんあ不届子
万ふ事を仕出か。一あらむ。此頌六と
いふ。老老叟でも。才助後を。決して
負ぬ積て。おさる。此叟歳を七拾三と
か。まじ。出を。大丈夫と。拾人や二十人

の醜夷^{けいご}を^い武^ぶ叟^{そう}を^い入^いでも^い喰^く殺^{ころ}て^いやる
で^いお^いざ^いろ^いう^いア^いハ^いハ^いハ^いハ^いハ^いハ

交易問答卷之下 大尾

卷下

三十五

う
まき
ん
が
し
物
か
き

交易うき問答もんたう此こゝ跋おき

昔むかし釋しやく也や如ごと來ら至いた能あた為な法はふ座ざを

渡わたりま大だい乘じやくのの後ごをを説せつえんととききれ

一いつ座ざれれ大だい衆しゆ乃の終しゆう惑まどおおほほくく。

是こゝ信しんももももののななららんんをを患うれふふ。

先ま試しのの小こ乘じやうれれ説せつ法ぽうああららままのの解げ

聞き縁えん覺かくをを知ちりりてて異い口く同どう音おんのの積せき

總そうのの法ぽうをを知ちりりししばば。それそれよりより

漸ぜんくく中ちゆう乘じやうのの稿こうありあり。其その後ごふふいいてて

佛ぶつ法ぽうのの極ごくをを大だい乘じやうのの六ろく面めん目もくをを

説法せつぽうありしとくやざのを観みて法ぽう

を説とくといふことはかたした時ときより始はじまること

きくもふ。此こゝ時とき才さい助すけれ才さい能のうくん

為なることはた此こゝ情じやうをあらはちし一いっ言ごんはた下げに

肺はい肝かんをあらはしし。終すまふことはた腹はらをあらはしし

ひる。実^トを^シ座^ガを^シ觀^ニる^ハ法^ヲを^シ説^トく^ニ此

おのづから

巨^ク學^ブと^シて^シ。

杉園仙史書卷



Faint background text, likely bleed-through from the reverse side of the page.

3500
128907

W373
K286
2

明治二年己巳四月
官許

加藤氏藏板

100 1795879

